

# 昭和29年当時の稲取町の様子

## 実験婦人学級開設当時の稲取町

伊豆半島の東海岸に位置する稲取（現在の町名は東伊豆町）は、現在では多くの温泉旅館を有する観光地として知られています。しかし、文部省から実験社会学級の指定を受けた当時の稲取町は、温泉はあるもののまだ観光地化はされておらず、漁業と農業を中心産業とする人口約8,000人、戸数1,500あまりの静かな町でした。

## 町の地形と特産品

防波堤に囲まれた稲取漁港の外と切り立った岩の海岸線には太平洋の波が打ち寄せ、海岸沿いの高台からは遙か沖に伊豆諸島の島々が望めます。全体として稲取には平らな土地は少なく、急勾配の坂道の多い町です。

稲取町の当時の特産品としては、温暖な気候を活かし山の斜面で栽培されたみかん（夏みかん、温州みかん）、海産物としては水揚げ前は銀色をしているため地元で「ぎんでい」と呼ばれるキンメダイやイカ、岩場で海女が収穫するテングサ（寒天の材料となる海藻）などがありました。



夏みかん出荷作業風景  
『昭和29年版 稲取町勢要覧』



テングサの選別作業風景  
『昭和29年版 稲取町勢要覧』



『昭和29年版 稲取町勢要覧』  
裏表紙

## 「日本三模範村」の歴史

稲取はかつて、宮城県生出村（おいでむら）、千葉県源村（みなもとむら）と並び、地方改良の模範村、いわゆる「日本三模範村」の1つとして知られた土地でした。これは明治期に村長をつとめた田村又吉（たむら またきち）が村の産業振興や公共的事業に尽力したことによります。田村村長はまた、母の会・青年会・処女会を設け、社会教育にも功績を残したといわれています。